実践事例

資質・能力、指導・評価を踏まえた新教育課程編成へ

青森県立青森高校

青森県立青森高校は、2017年度に学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力（せいこうりょく）」を設定。その到達度を測るための評価規準と尺度を示すルーブリックと、育成の過程を示すシラバスを作成している（本誌2019年4月号・特集を参照）。学校として育成を目指す資質・能力を共有した同校の教師たちは、新教育課程の編成をどのように進めようとしているのか、話を聞いた。

Q1 どのような方針で新教育課程を策定していこうとしているのか？

A1 育成を目指す資質・能力を踏まえ、自校に求められる授業観を校内で目線合わせすることが不可欠

宍倉（ししくら）校長　新教育課程の編成を進める上で重要なことは、育成を目指す資質・能力を踏まえてよりよい教育課程を追究するという大前提を校内で共有することです。本校では、学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力」を備えた「目指す生徒像」を設定しており、新教育課程の編成も、目指す生徒像の実現につながるものになります。本校では、教務部が中心となって新学習指導要領の「総則」を読み解き、新課程で「目指す生徒像」を実現する際にキーとなる4つの観点を言語化しました（P.70図3）。それは、授業改善、学習の見通し・振り返り、教科横断、そして学習評価です。その4つの観点を新課程における目玉として、教育課程編成を進めていくことになります。そのようにして、教育課程編成を教科間のコマ数の振り分けに終わらせず、あくまでも新課程における目指す生徒像の実現のためのものだと、校内に周知することが重要です。

千葉教頭　何のための教育課程編成なのかという大きな目的を共有した上で、教師一人ひとりの授業観の転換も求められます。生徒への情報伝達量を授業で最重要視してしまうと、どうしても「時間が足りない、教科書が終わらない」という考えに陥ってしまいます。しかし、これからの社会を踏まえて、生徒に必要な資質・能力を考えると、授業の中で必ず生徒が情報を獲得し、正解にたどり着く必要はなく、それぞれの考えが深まっていればよいと思います。新課程の教科書がまだ手元にない状態でも、これからの授業のあり方を校内で共通のものとすることも重要だと思います。

菊池先生　「青高力」については、学校全体、そして各学年で毎週のように話し合い、決めていったことを覚えています。「青高力」は、各学年での到達目標までをルーブリックにしたわけですが、やはりルーブリックで描いた状態を実際の授業に

校長
宍倉慎次
ししくら・しんじ
教職歴38年。同校に赴任して3年目。

教頭
千葉栄美
ちば・えみ
教職歴32年。同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科。

教務主任
笠井敦司
かさい・あつし
教職歴24年。同校に赴任して9年目。国語科。

外国語科主任・1学年副主任
菊池真理子
きくち・まりこ
教職歴26年。同校に赴任して6年目。外国語科。

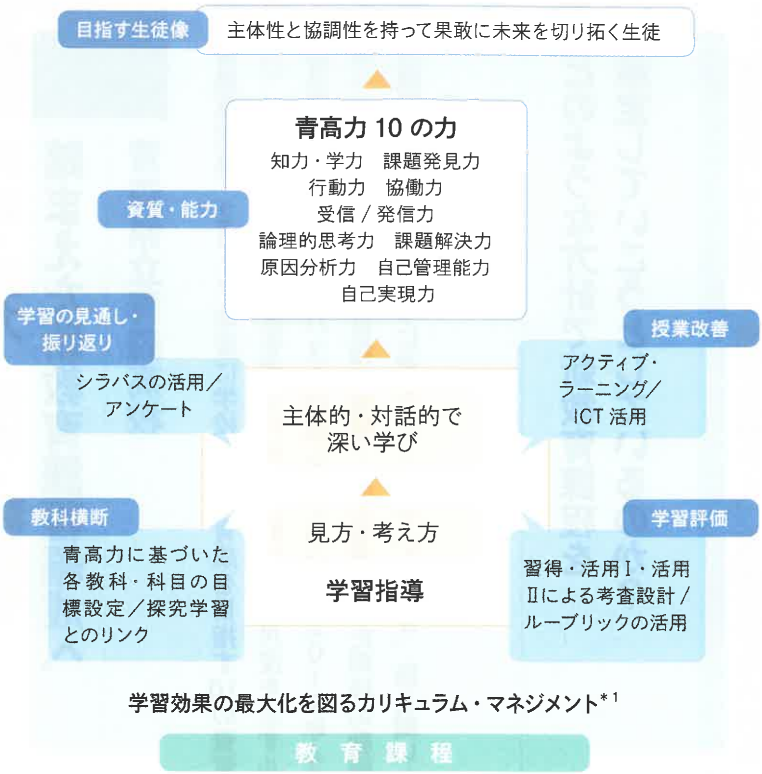
青森県立青森高校

◎旧青森県立青森高校と旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。綱領に「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」を掲げる。2017年度に文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。
◎設立　1900（明治33）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約280人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、京都大などに175人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ200人が合格。
◎URL　http://www.aomori-h.asn.ed.jp/

落とし込む段階になって、これまでとは違う生徒への問い方や題材の選び方にするなど、授業のあり方が変わっていきました。新課程においても、「青高力」のルーブリックと照らし合わせた上で、教育課程の編成に臨むことが求められると思います。

笠井先生　本校では、「青高力」として受信／発信力、論理的思考力を挙げています。自分の考えを適切な形で相手に伝えることは、本校の生徒に欠かせない資質・能力ですし、新学習指導要領でも重視されていますが、そうした資質・能力を生徒に育むために、教科を横断しながら英語の「論理・表現」と国語の「論理国語」の授業をつくっていこうとしていることも、本校ならではの選択肢だと思います。資質・能力をそれぞれの教科・科目の授業でどのように育むのか、どのようなテストで評価するのか、日々試行錯誤を重ねています。授業での生徒への発問、そして定期考査の問題が、知識を覚えているかどうかを問うているのか、それとも、知識を活用して課題に取り組むことを求める問題になっているのか、全教科で問題意識を持って各教師が問い直しています。本校では今年度から、教頭が各教科の定期考査の問題に目を通して、資質・能力の育成につながる作問になっているかを確認し、各教科にフィードバックしています。学校ぐるみで授業改善に取り組むことも、新教育課程の編成を進める土壌として大切だと思います。

図3　青森県立青森高校　カリキュラム・マネジメントの全体像



＊学校資料を基に編集部で作成。

Q2　どのような体制・ステップでコンセンサスを得ながら教育課程編成を行うのか？

A2　学年・教科を超えたプロジェクトメンバーが、「これからの教育」という視点を持って語り合う

千葉教頭　管理職、教科主任、分掌主任から成るキャリア教育委員会内直轄の作業チームである、新教育課程編成プロジェクトチーム（以下、PT）が新教育課程の編成を中心的に担います。PTは、学年、教科、分掌横断のメンバーで構成され、本校の「新教育課程編成大綱」で示されたステップ（図4）で、編成作業を行います。もちろん、PTに任せきりにせず、何を目指した教育課程編成であるかを全教師が共通理解し、情報提供などを通じてポジティブにかかわっていく機運を校内で高めていくことも大切です。

笠井先生　新教育課程編成のステップは「新教育課程編成大綱」に細かく明示していますが、実際には、作業

＊1　教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくこと。

を進める中でさらに工程を細かくして時間をかけたり、統合したりするケースも出てくると思っています。大切なのは、これからの社会と求められる学びのあり方を念頭に、学校の教育目標を踏まえて、教科の立場を超えて語り合いながら編成を進めていくイメージを全教師に持ってもらうことです。9月には、「大学入試改革×withコロナ×学校教育で大切なこと」というテーマで、新学習指導要領の「総則」の理念をAfterコロナの教育の形にどのように結びつけていくのかを校内で議論しました。そうした大きな視点による校内での対話を、特に作業工程の前半では重視しています。

菊池先生　新教育課程を多角的に考えるため、各学年、教科の教師がPTに参加しています。特に、保健体育などの技能教科の教師は、資質・能力の育成に注力してきました。ですから、例えば新教育課程の検討の過程で、他教科の教師にパフォーマンス評価について共有してもらうことなどは、新課程においては指導と評価の改善も不可欠であることを理解する上で大きな意味があります。

宍倉校長　目の前の生徒に一生懸命という意味では、本校もほかの多くの高校と同じです。ただ、新教育課程の編成において少しだけ先に歩き始めることができているとしたら、それは笠井先生を始めとするミドルリーダーが活躍できているからでしょう。教科書も入試もその実像がまだ見えないからこそ、「こんな資質・能力を育みたい」と、大きな視点で語り合うことが大切であり、そうした時に力を発揮してくれるのがミドルリーダーだと思います。

図4　新教育課程編成までのステップ（「新教育課程編成大綱」より）

1. 新教育課程編成のための事前の研究・調査〈グローバルな視座から〉　約1カ月（8月）

- 新学習指導要領改訂のポイントについて理解
- 県教育委員会「教育課程編成資料」の読み合わせ
- ベネッセのWebセミナー「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」への参加
- ベネッセのハイスクールオンライン内の「新課程レポート」や大学主催の研修会などを活用した校内研修
- 「大学入試改革×withコロナ×学校教育」で大切なことは何かを校内で議論

2. 学校の教育目標など、教育課程の編成の基本となる事項の確認と共通理解〈ローカルな視座から〉　約1カ月（9月～10月）

- 本校の綱領「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」と、綱領を体現する生徒像＝「目指す生徒像」、目指す生徒像に必要な資質・能力である「青高力」の内容の確認
- 現行教育課程で課題だと感じている事柄の洗い出し・明確化
- 現在の授業・考査・週末課題・行事などに抱いている課題感の洗い出し
- 「評価」に関する課題（特に「パフォーマンス評価」）について、実技科目の評価の仕方を学びつつ、評価の観点・方法についての共通理解
- 本校生徒の進路選択・受験の特徴の確認
- ここまでの視点を総合して、「新教育課程編成の方針」を策定

3. 新教育課程の編成作業　約1カ月（10月～11月）

- 必履修科目を軸に、標準単位数で2022度入学生の教育課程（1～3学年）を策定
- 上記1、2の視点を踏まえ、単位数の増減、学年の配置を調整
- 教育課程表「原案1」としてまとめる
- 上記2で策定した「新教育課程編成の方針」に基づく「原案1」をキャリア教育委員会に諮問

＊学校資料を基に編集部で作成。

より詳しい内容は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

事例・解説

新教育課程の編成方針と校内での推進方法

- 青森県立青森高校の実践事例・校内で目線合わせができる校内資料（教科横断・授業改善・学習評価の構図や論点など）

動画解説

有識者による新課程の動画解説も満載

―疑問や課題を解決！実践につながる！―
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ＞入試改革／新課程 からアクセス